●〈症例〉

カルチノイドと腺腫の
胃複合腫瘍の1例

小熊一豪 工藤 拓 萩原正示 森田重文
大野博之 河合 隆 鶴井光治 三坂亮一
川口 実 森安史典

東京医科大学／第4内科

【Key Words】 胃複合腫瘍, 胃カルチノイド

はじめに

今回我々は、胃腺腫内にカルチノイド腫瘍を合併した症例を経験し、内視鏡的治療を施行したので文献的考察を含めて報告する。

症 例

患者：54歳，男性。

主訴：特になし。

既往歴，家族歴：特記事項なし。

現病歴：1993年当院健診の上部消化管造影検査で胃隆起性病変を指摘されていたが放置。1995年上部消化管内視鏡検査を施行し，胃体中部小弯に褪色調の隆起性病変を認めた。生検にて腺腫と診断し経過観察となった。経過観察の1997年の上部消化管内視鏡検査時の生検にて，同じ病巣内に腺腫とカルチノイド腫瘍の両成分を認めたので，1998年精査加療目的にて入院となる。

入院時現症：身長167cm，体重62kg。血圧140/70mmHg，脈拍80/minで正。眼瞼結膜に貧血なし。眼球結膜に黄染なし。表在リンパ節は触知せず，胸腹部理化学所見に異常を認めず。顔面紅潮，水様性下痢，喘息発作，右心不全などのカルチノイド徴候を認めず。

入院時検査所見：血液一般，生化学検査，便潜血検査で異常を認めなかった。また，腫瘍マーカーはCA19-9のみ52.4(0～43)とやや高値を示した。

上部消化管X線所見：胃体中部小弯にイモ虫状の隆起を認め，隆起の立ち上がりは急峻で，表面の顆粒状変化も認め，胃腺腫あるいはⅡa型早期胃癌と診断した(Fig. 1)。

上部消化管内視鏡検査：1997年の上部消化管内視鏡検査写真を示す。胃体中部小弯に褪色調のイモ虫様の丘状隆起性病変を認めた。立ち上がり急峻であるが表面は比較的平滑であり内視鏡的には腺腫と診断した(Color 1)。

生検標本病理組織所見：HE染色生検組織像では，腺管は紡錘型の核を有する高円柱状細胞からなり，核は

Fig. 1 Double-contrast radiography of the stomach showed elevated lesion at the lesser curvature of middle gastric body.

Fig. 2 Histological findings showed tubular adenoma. (HE stain ×200)

基底側に規則正しく配列し，腺管腺腫と診断した。腺腫の間には比較的小型の類円形の核からなる細胞が小充実結節状に増殖する部分も認め，カルチノイド腫瘍を疑った(Fig. 2)。

グリメリウス染色とクロモグラニンA免疫染色を行ったところ，小充実結節状増殖部はともに陽性であった。一方腺腫部分はともに陰性であった。以上より同一病巣内に腺腫とカルチノイド腫瘍の両成分を認める複合腫瘍¹⁾と診断した(Color 2)。なお，組織では *Helicobacter pylori* は認めなかった。

臨床経過：1998年内視鏡的粘膜切除術(EMR)を行った。EMR直後の内視鏡像では粘膜下層に腫瘍残存は認めなかった。その後，外来経過観察しているが，腺腫，カルチノイドの再発，転移は認めていない。

切除標本病理組織所見：生検組織所見と同様に腺管腺腫の所見であった。しかし，カルチノイド腫瘍は全割を行い，グリメリウス染色にて検索したが認められ

Fig. 3 Histological findings showed tubular adenoma. (HE stain ×100)

Table 1 Reported cases of gastric tumor consisted of carcinoid and other tumor

年代	著者	症例内容
1983	風戸ら	管状腺癌と胃カルチノイドの合併
1983	越智ら	胃カルチノイドと早期胃癌の合併
1996	植田ら	胃カルチノイドの中に胃癌を合併
1996	河本ら	胃カルチノイドに高分化型腺癌を合併
1996	神吉ら	胃カルチノイドと早期胃癌の合併
1999	萱場ら	胃腺腫にカルチノイド腫瘍を合併
2000	自験例	カルチノイドと腺腫の胃複合腫瘍

なかった(**Fig. 3**)。

考 察

胃カルチノイドが同一腫瘍内に認められた本邦報告例では、胃腺腫との合併例は自験例を含め2例のみであった(**Table 1**^{2)~5)}。

本症例を推察すると、病巣周囲の腸上皮化生腺管及び腺腫に少数ながらグリメリウス、クロモグラニンAともに陽性細胞を認めたことより、これらの細胞からカルチノイド腫瘍が発生したと推測可能である。すなわち正常胃粘膜が腸上皮化生粘膜となり、その腸上皮化生腺管から別々に腺腫とカルチノイドが発生し、この段階で生検が行われ、複合腫瘍と診断したものと思われる。また、EMR施行時カルチノイド腫瘍を認めなかったのは、EMR断端近くのみカルチノイドが存在し、burning effectで消失したことや、可能性は低い自然退縮なども考えられる。

本症例では血清ガストリン測定は施行されていないが、A型胃炎の所見は認めなかったことと多発例でなかったことより、A型胃炎に伴うものではなく、sporadicに発生したカルチノイドと考えられる。

おわりに

本例はカルチノイドの発生を考える上で極めて貴重な症例と考えられ報告した。

文 献

- 1) 千葉 勉: 消化管カルチノイド腫瘍に対する新しい考え方—特に胃カルチノイド腫瘍について、第72回北野学術講演会、北野病院概要、43: 174~178, 1998.
- 2) 風戸計民, 小林 理, 金 徳辰, 他: 同一腫瘍内に管状腺癌を共有する胃カルチノイド(胃内分泌細胞癌)の1例。胃と腸、18: 245~253, 1983.
- 3) 越智邦明, 石井慶太, 安藤昌之, 他: 同一病巣内の胃カルチノイドと腺癌の共存例。日臨外会誌、45: 716~721, 1984.
- 4) 河本喜代美, 渋谷大助, 櫻田弘之, 他: 高分化型腺癌を合併した胃カルチノイドの1例。仙台市立病院医誌、16: 53~56, 1996.
- 5) 萱場尚一, 後藤康幸, 鈴木俊郎, 他: 胃腺腫にカルチノイド腫瘍を合併した1例。Gastroenterological Endoscopy、41: 726, 1999.

A case of composite adenoma-carcinoid tumor of the stomach

Kazutake Oguma Taku Kudou
Shoji Ogihara Sigefumi Morita
Hiroyuki Ohno Takasi Kawai
Mituji Tsurui Ryouiti Misaka
Minoru Kawaguti Fuminori Moriyasu

A case of composite adenoma-carcinoid tumor of the stomach is reported. The patient was a 54-year-old man. He was pointed out to have a gastric elevated lesion in 1993. In 1995, the endoscopic examination showed elevated lesion in the middle body of the stomach. The elevated lesion proved to be an adenoma by histopathological findings of the biopsy specimen. In 1997, the tumor was diagnosed as carcinoid by histopathological findings of the biopsy specimen. The tissue of the adenoma included typical cells of carcinoid, which were positive for Grimelius and Chromogranin A stains. The tumor proved to be a composite tumor containing both an adenomatous component and a carcinoid component by histopathological findings of the biopsy specimen. Histopathological findings of the endoscopic mucosal resected-specimen was adenoma and carcinoid was not included.

We reported a case of composite adenoma-carcinoid tumor of the stomach and this case was rare and full of suggestion.

Fourth Department of Internal Medicine, Tokyo Medical University.

(カラーは4頁に掲載)